様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０２１５６

研究課題名（和文）現代独仏圏の哲学的人間学とＪ・マクダウェルのアリストテレス的自然主義

研究課題名（英文）Contemporary Philosophical Anthropology in Germany and France compared with Aristotelian Naturalism of J.McDowell

研究代表者
音喜多　信博（OTOKITA, Nobuhiro）

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：６０３２９６３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究において私は、「物理主義」という意味での自然主義が大きな影響力をもっている今日の哲学界の状況のなかで、主に20世紀前半の独仏圏を中心に展開されたM・シェーラー、E・カッシーラー、M・メルロ＝ポンティらの「哲学的人間学」の現代的意義を評価しなおす作業に従事した。私は、哲学的人間学のもつ自然主義的傾向を、今日の英米圏の認識論や倫理学において「アリストテレス的自然主義」の立場をとっているJ・マクダウェルの思想と比較・対照することによって、その近親性と差異とを明らかにし、哲学的人間学の思想が今日の認識論においてもつ意義を評価した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本においては、フッサールやハイデガーをマクダウェルの認識論や徳倫理学の観点から再解釈した先駆的な試みとして、たとえば門脇俊介『理由の空間の現象学』（2002年）、『破壊と構築』（2010年）などがあげられる。本研究は、このような試みを、フッサールやハイデガーに影響を受けて自らの思想を形成した「哲学的人間学」の哲学者たちについて遂行したものである。そのことによって、現象学をはじめとする「大陸系」の哲学と「英米系」の哲学との間での共通の議論の土壌を作っていこうという昨今の哲学研究の動向に寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：In this research, I tried to re-evaluate modern significance, in the era of philosophical naturalism as taken as ‘physicalism’, of the phenomenological anthropology that had been deployed by Max Scheler, Ernst Cassirer, Maurice Merleau-Ponty and other several German and French philosophers mainly in the first half of the 20th century. I compared the naturalistic view of philosophical anthropology with the contemporary ‘Aristotelian naturalism’ of John McDowell and made clear their similarities and differences, especially in the perspective of philosophy of knowledge.

研究分野：人文学

キーワード：哲学的人間学　現象学　シェーラー　カッシーラー　メルロ＝ポンティ　マクダウェル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

現代的な意味での「哲学的人間学」が勃興してきた 20 世紀の前半は、E・フッサールの現象学や M・ハイデガーの基礎的存在論などの「反自然主義」的哲学が栄えた時期と一致している。実際に、シェーラーやメルロ＝ポンティなどは、フッサール現象学から出発して自らの哲学的体系を作り上げた。しかし、同時に、哲学的人間学の哲学者たちはフッサールやハイデガーとは異なり、人間についての経験諸科学との対話を積極的におこない、経験諸科学の成果に対して一貫した哲学的解釈を加えることによって総体的な人間観を作りあげるということを自らの課題としていた。この意味で、彼らの思想は「自然主義」的な傾向を帯びていると言える。

しかし、哲学的人間学の自然主義は、今日とくに英米圏においてしばしば「自然主義」と同義のものと見なされている「物理主義」とは異なっている。つまり、哲学的人間学の哲学者たちは、人間的事象の記述を物理学の言語に還元することが可能であるとは見なしておらず、存在論的には一種の多元主義をとっていたと言える。たとえば、カッシーラーの『シンボル形式の哲学』（1923-29 年）では、「シンボル形式」は「神話的形式、言語形式、理論的認識（自然科学）の形式」に区分されるが、これらはいずれかに還元されるものではなく、等しく人間の客観的認識の生成にかかわる主観の形式とされていた。また、メルロ＝ポンティは『行動の構造』（1942 年）において、存在の構造化の３つの段階として「物理的秩序、生命的秩序、人間的秩序」の区別をおこなっていた。これら３つの秩序は、それぞれ前の段階の構造がより統合度の高い後の段階の構造のうちに部分として組み込まれるという関係にある。ここでも、３つの秩序の物理的秩序への還元が図られるわけではなく、それぞれの段階では対象を捉えるわれわれの認識論的な態度が変わってくるということが主張されていた。

このような立場は、自然主義を物理主義と同一視する今日主流の立場からすれば、自然主義とは呼べないということになろう。しかし、今日の英米圏でも、アリストテレスの伝統に基づく議論を展開している論者においては、「自然」についての別様の捉え方が見られる。本研究は、哲学的人間学の思想を、そのような現代英米圏のアリストテレス主義的な議論と関連づけて解釈しなおそうというものである。

２．研究の目的

さて、アリストテレスにとっての自然的事物とは、物理主義がそう見なすような物理的性質の集合体なのではなく、その形相として変化の原理を内に含んだ、目的の相の下に見られた事物である（『自然学』）。アリストテレスにおいては、人間の魂も物理的自然として説明されるべきものではなく、他の生物の魂と目的論的な階層を成しているものとされている。「理性的動物」としての人間は、動物の一種としては魂の「栄養的能力」や「感覚的能力」を基盤として内包しているが、理性的存在としては、それらの基盤をより高い目的のために使用していくという独自性をもっている（『魂について』）。

一方で、現代英米圏の議論に目を向けると、J・マクダウェルは、『心と世界』（1994 年）や「二種類の自然主義」（1996 年）のなかで、倫理的性格の形成についてのアリストテレスの議論に依拠しながら展開される自らの認識論的な立場を、「第二の自然の自然主義」と呼んでいる。マクダウェルによれば、われわれ人間はたしかに他の動物と共通する知覚的感応性をもっているのであるが、感性的経験は（経験主義が想定するような）「裸の所与」として受容されているのではなく、すでにして（カント的な意味での）悟性の能動性の圏域内に取り込まれて変容を被っている。この意味において、人間の自然本性は、ある種の規範性をはらんでいるのである。

私は、哲学的人間学の哲学者たちの自然についての考え方は、マクダウェルのいうような意味でのアリストテレス的自然主義とある種の類縁性をもっているのではないかと考えた。そのことを明らかにすることが本研究の全体的関心であるが、特に M・シェーラー[1874-1928]、E・カッシーラー[1874-1945]、M・メルロ＝ポンティ[1908-1961]らを取り上げて、つぎの３つの目的のもとに研究をおこなった。(1)哲学的人間学におけるアリストテレス主義的側面について、概括的な整理をおこなう。(2)現代英米圏においてアリストテレス的自然主義の立場をとるマクダウェルらの議論のうち、人間学的な課題と接点をもつものを取り出し整理する。(3)哲学的人間学とマクダウェルの思想を比較して、その共通点と差異を明らかにし、哲学的人間学の積極的な現代的意義を評価する。

３．研究の方法

本研究は、研究代表者が単独でおこなう研究であり、文献資料の読解と分析、および研究成果の学会等での口頭発表、学会誌等での論文発表というかたちで遂行された。

４．研究成果

以下では、本研究の成果を５つの観点にわけて説明したい。

(1) 哲学的人間学に見られる階層理論についての基礎的研究

私は、本研究全体への導入として、哲学的人間学に見られる階層理論についての研究をおこな

った。その結果、哲学的人間学が提唱している世界や心についての階層的な捉え方と、アリストテレスが魂の三階層の理論で示したような捉え方との間に、ある種の類似性があるということを明らかにした。

アリストテレスの『魂について』においては、魂の三つの能力が論理的な階層性を成すものとして区分されているが、それに比することができるようなかたちで、シェーラー、カッシーラー、メルロ＝ポンティにおいては人間の心的機能についての一種の階層理論が見られる。シェーラーは、『宇宙における人間の地位』（1928 年）において、「感情衝迫」から「実践的知能」まで、生物の心的機能を四段階の階層性において捉えていた。そのうえで、人間の「精神」は、このような他の生物と共有する心的機能を前提としながらも、環世界の拘束を越える「世界開放的」な自由を獲得すると述べている。メルロ＝ポンティは『行動の構造』において、シェーラーの「世界開放性」概念に大きな影響を受けながらも、その宇宙論的な含意は切り捨て、生物の行動形態を「癒合的形態、可換的形態、シンボル的形態」に区分してそれらを現象学的に分析している。さらにカッシーラーは、『シンボル形式の哲学』において、シンボル形式を「神話的形式、言語形式、理論的認識（自然科学）の形式」に区分し、人間の客観的認識が高まっていくさまをカント主義的な立場から記述した。

これらの記述に共通している特徴として、階層の上位のものは下位のものの存在を不可欠の前提としているとともに、下位のものは上位のものにその部分として取り込まれ、その自律性を失っているというように、諸々の層は「統合」的関係にあるものと構想されているということがあげられる。そして、その統合の向かう方向性は、人間の行動や認識の自由の拡大という規範的なものであることが窺われる。私は、このような議論を手がかりとしながら、哲学的人間学の階層理論のもつアリストテレス主義的特徴を総体的に整理した。

もちろん、哲学的人間学の議論を、自然的事物の内に目的論的な意味での形相を見てとるアリストテレスの議論と同一視することはできない。しかし、アリストテレスにおいても哲学的人間学においても、このような階層性は事実的なそれではなく、論理的あるいは本質現象学的に獲得されるものであると考えられている。そして、そのような階層性は、いずれも人間的なものの実現へと向けて上昇するように構想されているわけであるが、そういった考え方は人間の本質（テロス）についてのある規範的な理解を前提としていると言えよう。

(2) マクダウェルにおけるアリストテレス的自然主義についての基礎的研究

私は、現代の英米圏においてアリストテレス的自然主義の立場から認識論や倫理学を展開しているマクダウェルの「第二の自然の自然主義」の内実について、『心と世界』と「二種類の自然主義」を中心にして基本的な整理をおこなった。F・フット、J・マクダウェル、R・ハーストハウスらは、ダーウィン主義の発展によって、自然の目的論的構造というアリストテレス的な見地が否定される傾向の強い今日において、どのようなかたちで人間の自然本性の規範的性格が表現されるべきかについて精緻な考察をおこなっている。彼らの主たる関心領域は徳倫理学であるが、マクダウェルは人間の自然本性をめぐる議論を認識論や心の哲学の領域へと拡張している。

マクダウェルによれば、デカルトの物心二元論やヒュームらによる世界の脱知性化の試み以来、自然的世界は人間的意味や価値を容れる余地のない「死せる物体」の世界となった。一方で、人間の心については、デカルトが考えたような物理的世界には何ものをも負わない実体とされるか（マクダウェルのいう「威丈高なプラトニズム」）、逆に物理的性質に還元されて説明されるか（「露骨な自然主義」）という二者択一に陥っている。マクダウェルは、このような「威丈高なプラトニズム」と「露骨な自然主義」とは実は共犯関係にあるのであり、そのような近代的二項対立に陥る以前のアリストテレス的な世界観に範をとろうとする。

一方、哲学的人間学が記述している世界は、われわれの心がそこから切り離され、機械論的な「死せる物体」の集合体として捉えられる以前の、われわれに直接的・原初的に与えられる世界である。それと相関するかたちで、人間のほうも、その原初的なあり方においては、観相的な認識主体ではなく実践的な行為の主体として捉えられる。「認識と労働」（1926 年）におけるシェーラーや『知覚の現象学』（1945 年）におけるメルロ＝ポンティがその詳細な現象学的記述をおこなっているように、原初的な世界は、われわれの実践的関心に基づく意味や価値に満ちた世界である。その意味においては、哲学的人間学が追求している世界は、マクダウェルが近代哲学の病理を批判してそこに立ち返ろうとした世界と一致していると言うことができる。

(3) マクダウェルの「概念主義」とそれに対する現象学的批判

さて、両者のあいだの多くの類似点にも関わらず、哲学的人間学の主張はマクダウェルの「第二の自然の自然主義」と完全に一致しているというわけではない。

私は、「概念主義」とも特徴づけられるマクダウェルの認識論を、シェーラーやメルロ＝ポンティの現象学的な認識論と比較するための手がかりとして、2007 年に *Inquiry* 誌上において展開された「マクダウェル＝ドレイファス論争」について研究をおこなった。

マクダウェルによれば、われわれ人間の感性的経験は、経験主義的な「裸の所与」なのではなく、はじめから概念の能力としての悟性の勢力圏にあるのであり、（少なくとも潜在的には）命題の一部となって、経験の正当化に寄与することができるのでなければならない。言いかえるならば、感性的経験はすでにして「理由の空間」（W・セラーズ）に組み込まれているのである。

これに対して、H・ドレイファスは、とくにアリストテレスの「実践的思慮（フローネーシス）」を主題としてマクダウェルの「概念主義」に論争を挑み、ハイデガーやメルロ＝ポンティの実存主義的現象学の立場から、言語的な概念化以前の「動機づけ（motivation）」の秩序を取り出している。ドレイファスによれば、熟達者（フロニモス）の行為やアフォーダンスの非反省的な知覚には言語的な概念が介在していないにもかかわらず、それらはマクダウェルが批判するような「裸の所与」ではない。なぜなら、これらのものも、主体に対して適切な行為を促してきたり、さらなる知覚的な明晰化を促してきたりする点において、「規範的」なものと言えるからである。ドレイファスは、このように自然の空間と理由の空間のどちらにも属さず、その中間に位置づけられていながら、一種の規範性をもつ領域を、メルロ＝ポンティにならって「動機づけ」の領域と呼んでいる。さらにドレイファスと Ch・テイラーは、彼らの共著『実在論を立て直す（*Retrieving Realism*）』（2015 年）のなかで、いかにして前概念的なものから概念的なものが発生してくるのかということを、段階的なかたちで整理している。

さて、このようなドレイファスのマクダウェル批判には、学ぶべきことが多いのは事実である。しかし、私が見るところでは、ドレイファスは没入的対処と離脱的態度とを鋭く対立させて、もっぱら前者を称揚しているが、この極端な二元論的立場をとったことによって、後から両者を結びつけることが困難になっているように思われる。これに対して、メルロ＝ポンティは、『行動の構造』や『知覚の現象学』において、行動の癒合的形態から象徴的形態への上昇について記述している。メルロ＝ポンティは、没入と離脱を対立させるというよりも、その双方を、世界内存在としての人間が世界と関わる際のふたつの根源的なあり方として捉えようとしている。そして、私は、このような両義性を忠実に捉えるということが、シェーラーを初めとする哲学的人間学の思想家たちが共通して目指しているものであると考えた。私は、以上のような観点から、ドレイファスのプラグマティックなメルロ＝ポンティ理解の限界を指摘した。

(4) 哲学的人間学とマクダウェルにおける言語と客観的知識

最後に、私は哲学的人間学とマクダウェルとを比較することによって、その差異を明らかにするとともに、哲学的人間学がもつ認識論的な意義について積極的な再評価をおこなった。

マクダウェルは『心と世界』において、言語的な概念能力をもつ人間と他の「もの言わぬ動物」との差異を強調する。人間は言語をもつことによって自己意識的な存在となり、自分の経験を外側から眺めることができるようになった。つまり、人間は、自分の経験を越えた「客観的世界」、あるいは自分の信念を越えた「真なる知識」という規範的観念をもてるようになったというわけである。（この観点は、マクダウェルが大きな影響を受けている D・デイヴィドソンも共有している。）

自己意識の獲得と客観的知識の探究の可能性が結びついているという考え方そのものは、人間の「世界開放性」を強調するシェーラーをはじめとする哲学的人間学の思想家たちも共有するところである。しかし、以下のような相違点も存在する。マクダウェルにおいては、言語が自己意識の獲得と客観的知識という観念の前提条件であった。これに対して、哲学的人間学の思想家たちは、言語的な概念化以前に客観的知識の獲得へと向かう動きが始まっていると考える。

たとえば、カッシーラーのシンボル形式の生成の理論においては、言語的概念以前に表情的な相貌をもって世界を知覚する「神話的形式」の段階が想定されているが、そこにおいてすでに客観的知識の獲得のプロセスは始まっている。カッシーラーは、ある感性的な経験が他の感性的経験の「代理（代表）」となるという事態のなかに、すでにシンボルの萌芽を見ている。言語的なシンボルや「客観的」認識を可能とする科学的概念のシンボルは、すでに感性的経験において始まっているこの代表の機能の継承として捉えられるべきなのである。

また、メルロ＝ポンティの間主観性の現象学においては、言語獲得以前の幼児はすでに間身体的な知覚世界を他者と共有しており、そのことが成人における客観性の観念の基盤となっているとされる。私は、このようなメルロ＝ポンティの主張の認識論的意義を際立たせるために、比較認知心理学の立場から言語発達の研究をおこなっている M・トマセロの「共同志向性」の理論により、メルロ＝ポンティの議論を補強することを試みた。『思考の自然誌』（2014 年）のトマセロによれば、ヒトの幼児は、他人と目標を共有する共同志向的活動をとおして、自他のパースペクティブの違いを学んでいく。その過程において、幼児は、視点の異なる者どうしが共有する客観的世界という観念を獲得していくのであり、この世界こそが言語発達のための概念的基盤を形成している。つまり、マクダウェルが考えたように、言語の獲得によってはじめて客観的世界の観念が形成されるというよりも、言語獲得以前の幼児においてすでに客観的世界の観念の萌芽が見られるのである。

以上のように、私は、マクダウェルの思想と対比することによって、現代哲学の議論のなかに哲学的人間学を位置づける可能性について考察した。カッシーラーやメルロ＝ポンティのように考えるならば、経験主義的な「所与の神話」を回避しつつ、その反動である概念主義をも回避できる。つまり、感性的経験をあらかじめ言語的に概念化しておかずとも、単なる「裸の所与」ではないような、人間の知性によって侵食されている「第二の自然」としての感性的経験のあり方を忠実に表現できるものと思われる。

(5) 本研究成果の国内外における位置づけと今後の展望

最後に、本研究成果の国内外における位置づけと限界、今後の展望について述べたい。

経験諸科学が人間についての「事実」の集積に専心するのに対して、哲学的人間学は人間についての「本質」的概念を彫琢しようとする。そのため、後者は、シェーラーの「世界開放性」の概念に見られるように、人間と他の動物との質的差異を強調する傾向をもっている。しかしながら、進化生物学などの発展により、20 世紀前半の哲学的人間学が参照していた経験諸科学の成果が今日では古いものとなってしまっている以上、それに基づいて人間の本質について考察する哲学的人間学も、時代遅れな人間中心主義的試みと見なされているというのが現在の一般的状況ではないだろうか。本研究は、このような状況のなかで、今日の英米圏において「アリストテレス的自然主義」の立場をとるマクダウェルらの視点を借りながら、哲学的人間学の思想を再解釈し、その現代的意義を明らかにしようというものであった。

日本においては、フッサールやハイデガーをマクダウェルの認識論や徳倫理学の観点から再解釈した先駆的な試みとして、たとえば門脇俊介『理由の空間の現象学』（2002 年）、『破壊と構築』（2010 年）などがあげられる。本研究は、このような試みを、フッサールやハイデガーに影響を受けて自らの思想を形成した「哲学的人間学」の哲学者たちについて遂行するものであるという点において独自性がある。本研究においては、哲学的人間学とマクダウェルが前提としている人間観とそこから帰結する認識論との関連に注目し、両者を比較対照したという点では一定の成果を出せたものと思われる。

一方で、本研究にはつぎのような限界もあった。まず、カッシーラーについては、上記のような研究を遂行したものの、その成果を独立した雑誌論文のかたちで発表することができなかったので、次年度以降発表できるように努めたい。また、本研究全体の射程について述べるならば、今日の哲学全般の議論のなかで哲学的人間学を評価できたとは言いがたく、その意味では、両者の表面的な比較に終始したという限界もある。今後は、本研究での成果を、マクダウェルのみならず W・ジェイムズらの初期プラグマティストたちやデイヴィドソンらの思想も視野に入れることによって、より深い認識論的なレベルで再検討していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 音喜多信博	４．巻 第38号
２．論文標題 メルロ＝ポンティとトマセロにおける他者の志向性の理解について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 現象学年報	６．最初と最後の頁 67―74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 音喜多信博	４．巻 第29号
２．論文標題 主観性・受動性・間主観性--佐藤透『質的知覚論の研究--世界に彩りを取り戻すための試論--』への現象学的コメント	５．発行年 2022年
３．雑誌名 MORALIA（モラリア）	６．最初と最後の頁 5―21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 音喜多 信博	４．巻 第25巻第1号
２．論文標題 ベナー/ルーベルの現象学的看護論における患者の「病い」体験の理解	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本糖尿病教育・看護学会誌	６．最初と最後の頁 79―82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24616/jaden.25.1_79	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 音喜多信博	４．巻 第106号
２．論文標題 マックス・シェーラー「認識と労働」におけるプラグマティズム評価	５．発行年 2020年
３．雑誌名 アルテス・リベラレス	６．最初と最後の頁 15―27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 音喜多信博	4．巻 第50号
2．論文標題 ドレイファス／テイラー『実在論を立て直す』から見たメルロ＝ポンティ現象学	5．発行年 2019年
3．雑誌名 フィロソフィア・イワテ	6．最初と最後の頁 3―17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 音喜多信博
2．発表標題 マックス・シェーラーのプラグマティズム評価
3．学会等名 第３回名古屋技術哲学研究会
4．発表年 2024年

1．発表者名 音喜多信博
2．発表標題 メルロ＝ポンティとトマセロにおける他者の志向性の理解について
3．学会等名 日本現象学会 第43回研究大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 音喜多信博
2．発表標題 佐藤透『質的知覚論の研究--世界に彩りを取り戻すための試論』へのコメント
3．学会等名 第44回フッセルアーベント（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 音喜多信博
２．発表標題 ベナー／ルーベルの現象学的看護論における患者の「病い」体験の理解
３．学会等名 第25回日本糖尿病教育・看護学会学術集会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 音喜多信博
２．発表標題 ドレイファスらによるプラグマティックなメルロ＝ポンティ解釈について
３．学会等名 想像と画像についての研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 音喜多信博
２．発表標題 ドレイファス／テイラー『実在論を立て直す』から見たメルロ＝ポンティ現象学
３．学会等名 岩手哲学会 第52回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 佐藤透・音喜多信博・小林睦・馬渕浩二	４．発行年 2017年
２．出版社 金港堂出版部	５．総ページ数 232
３．書名 人間探究―現代人のための４章―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「メルロ＝ポンティとトマセロにおける他者の志向性の理解について」（日本現象学会Webサイト）
http://pa-j.jp/journal/38.pdf
「主観性・受動性・間主観性」（東北大学機関リポジトリTOUR）
http://hdl.handle.net/10097/00136499
「ベナー/ルーベルの現象学的看護論における患者の「病い」体験の理解」（日本糖尿病教育・看護学会Webサイト）
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaden/25/1/25_79/_article/-char/ja
「マックス・シェーラー「認識と労働」におけるプラグマティズム評価」（岩手大学リポジトリ）
https://iwate-u.repo.nii.ac.jp/records/15087

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関